

動物のいのち見つめて

秋田市大森山動物園 園長 小松 守 先生



秋田市出身

1975年 帯広畜産大学 畜産学部 獣医学科卒
同年～ 秋田市大森山動物園に配属
1998年～ 秋田市大森山動物園園長

飼育員や獣医師、さらに園の経営的立場の園長として、約 35 年、ずっと動物と動物園に関わってきたが、これらの体験等を通じて、動物の命（いのち）を改めて見つめなおし、考え、思うところ、また我が師ともいえる動物から学んだこととお話したい。

1 同じ命、生き残りに成功した素晴らしい命たち（普遍性と多様性）

動物（生物）の根本にあるものは普遍性と多様性であるが、動物たちを見ていると実によく分かる。私たち人を含め体つきは、実に当たり前だが、生きることという目的を果たすために授かったもので、そこに普遍性がある。しかし、一方では生きる環境や生き方などによって、動物ごとに実に多様性に富んだ容姿には誰しもが驚かされる。動物たちの姿は、必死に生き残りをかけ自然の篩いかけられた証でもある。

すべて同じ命だが、そこには多様な個性があり、その生き方は尊重されている。共生という概念も見えてくるのではないだろうか。

2 命をつなぐ大切な営み・子育て（命の連続性）

動物（生物）の根本に大事なものがもう一つある。それは連続性である。誕生した個の命は時が来れば否応なしに死を迎え、消えていく。命は別の個に引き継ごうとする。生殖、命の連続である。動物が高等になるほどその仕掛けは実に巧妙になるが、どんな動物も根本にある大切な部分は決して踏み外さない。命の連続性が危うくなるからである。この大切な部分はヒトという動物でも違いがないはずであるが・・・。

3 命を感じる人々 入園者から気づかされて

ある冬の動物園の一場面。お母さんと女の子との会話。「お母さん、鳥が白い息を吐いているよ。」素直な女の子に、お母さんが「○○ちゃんの息も白いね。鳥さんもあなたも同じに生きてるんだね」と会話を交わしていた。私はこのお母さんの何気ない言葉に、相手を思い（利他）、共に生きる命（共生）を伝える道德の基本を感じた。教育というものは当たり前のところにあるのかなと思った。

4 日本人の動物観と動物園

以前、大森山動物園で脚を骨折し、生きることが難しくなった子キリンがいて、その処置を懸命にしたことがあった。「義足のキリンたいようの物語」として本にもなった。その後ずっと考え続けていることがある。私たち動物園のスタッフ、あるいは周囲の人々、そして多くの市民は、「たいよう」（動物）について「死」という一文字を口に出さなかったが、この物語は動物に対する日本人的な感性が底流にあったからこそできあがったように思えてくる。そこに日本人としての自然観、動物観が見えてくる。